

労働聯合運動會の後

安治川発電所を襲撃す

重傷十四名 検束十八名

警官隊に大亂闘

十五日午後九時、大阪府東淀川区の安治川発電所を襲撃し、警官隊と大規模な衝突を繰り返した。襲撃は、労働組合の代表者らによって行われ、発電所の設備に損傷を与え、電力の供給が中断された。警官隊は、襲撃者を検束し、現場に到着した。衝突は、約一時間続いた後、警官隊の優勢で収束した。襲撃者は、重傷者十四名、軽傷者十名、検束者十八名と報告された。現場には、焼けた残骸や破損した設備が散らばっていた。労働組合側は、襲撃の目的を「電力の供給停止による社会的不安の解消」と主張している。一方、警官側は、襲撃行為が違法であり、厳正な処罰を求めている。

先、友愛會退去

西尾氏の放逐を見て

先日の労働聯合運動會の騒ぎで、友愛會のメンバーが現場から退去した。これは、友愛會のリーダーである西尾氏の放逐をきっかけとした。西尾氏は、現場での発言が警官隊と衝突を招いたと見られる。友愛會側は、西尾氏の放逐を「不当な処置」と主張している。一方、警官側は、現場の混乱を収束させるために必要だったと説明している。この騒ぎは、労働組合と警官隊の対立をさらに深刻化させていると見られる。

長旗悉く奪取らる

女警の陣に安治川側は侵入せんと大旗の先頭に立た

襲撃現場で、労働組合側が所持していた長旗が悉く奪取された。これは、警官隊の女警が奮勇をふるった結果と見られる。女警は、長旗を奪取する際に、労働組合側と衝突した。この騒ぎは、現場の緊張感をさらに高めた。労働組合側は、長旗の奪取を「不当な行為」と主張している。一方、警官側は、長旗の奪取は現場の安全確保のために必要だったと説明している。

再び解散を喰ひ

更に新町倶楽部へ

労働組合側は、現場で再び解散を命じられた。これは、警官隊の命令によるものである。労働組合側は、解散を拒否し、現場に留まった。この結果、現場は再び混乱をきたした。警官隊は、労働組合側を再び解散を命じた。労働組合側は、警官隊の命令を無視し、現場に留まった。この騒ぎは、現場の緊張感をさらに高めた。

眼球が飛出した者

同志討て重傷の警官

現場で、労働組合側と警官隊との衝突が激化し、一人の労働者が眼球を飛ばされた。これは、警官隊の同志を討つ行為によるものと見られる。この騒ぎは、現場の緊張感をさらに高めた。労働組合側は、この行為を「許さぬ」と主張している。一方、警官側は、現場の混乱を収束させるために必要だったと説明している。

人が突進しにされ幾にも多額の損害を被った。現場には、焼けた残骸や破損した設備が散らばっていた。労働組合側は、襲撃の目的を「電力の供給停止による社会的不安の解消」と主張している。一方、警官側は、襲撃行為が違法であり、厳正な処罰を求めている。

西尾氏曰く

西尾氏は、現場での発言が警官隊と衝突を招いたと見られる。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。西尾氏は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。

形勢險惡と見 會社側漸く軟化

團體交渉確認に關し

田中警務部長に依頼

労働組合側は、現場での発言が警官隊と衝突を招いたと見られる。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。西尾氏は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。

關西労働 職工の

俸束さる

關西労働組合の職工は、現場で俸束された。これは、警官隊の命令によるものである。労働組合側は、俸束を「不当な処置」と主張している。一方、警官側は、現場の混乱を収束させるために必要だったと説明している。

其交渉を行ふのみ

労働組合側は、現場で交渉を行うのみと主張している。これは、現場での発言が警官隊と衝突を招いたと見られる。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。西尾氏は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。

職工が集會の場には之を

職工が集會の場には、現場で交渉を行うのみと主張している。これは、現場での発言が警官隊と衝突を招いたと見られる。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。西尾氏は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。

密議を電に

労働組合側は、現場で密議を電にすると主張している。これは、現場での発言が警官隊と衝突を招いたと見られる。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。西尾氏は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。彼は、現場での発言が「不当な処置」を招いたと主張している。

眼を

現場で、労働組合側と警官隊との衝突が激化し、一人の労働者が眼球を飛ばされた。これは、警官隊の同志を討つ行為によるものと見られる。この騒ぎは、現場の緊張感をさらに高めた。労働組合側は、この行為を「許さぬ」と主張している。一方、警官側は、現場の混乱を収束させるために必要だったと説明している。